

子育てに関する研究

— 幼児の生活と親のしつけのアンケートから —

佐藤 陽子*

Research on Child Rearing

— Young Children' Life Styles and Parents' Discipline —

Yoko Sato

The purpose of this study is twofold. First is to learn about certain aspects of young children's life styles, such as eating, changing clothes, and completing toilet training. The other is to study parents' discipline towards their children in daily life.

The questionnaires are sent to 254 children' parents and are mainly filled in by their mothers. The children's life styles seem to be greatly influenced by their parents' life. That is, their waking and sleeping time, and so on. In eating behavior, many children dislike some kinds of vegetables, but they tend to like fruit and meat. Children in day nurseries usually get up earlier and go to bed later than children in kindergartens. Concerning parents' discipline, they expect their children to be more independent and socially well-mannered rather than just obedient.

Key Words: life style, young children, discipline, child rearing

子どもを育てることは人間にとって最も基本的なしかも重要な営みである。古今東西を問わず、親が子どもをどのように育てるかを家庭生活の中心としながら、その時代や文化に強い影響を受けて子育てをしてきた。子育ては、人間の幸福の追求の大事な部分を担っている。親が子を育てる時、大切なことはいくつかあげられる。しかしいつの時代にも、どの文化にも共通する普遍的な回答は無いといえる。現代の日本人の親はどのように子どもを育てることを期待するのか。自分の環境や社会生活や文化に適応し、親が描く道筋を歩むと安心する親も多い。しかしそれだけではこれからの時代を生きる子どもにとって、必ずしもベストといえない。子を育てるのは親だけの役割ではないが、誕生から小学校に入学する5、6歳頃までの子育ては家族としての親が子育ての重要な役割を担っている。幼児期の子育ては知的教育よりも世話や援助といった要素が強いことも確かである。幼ない子どもたちと遊び、言葉を交わすといかに子どもが自分を育てている人から大きく影響されているかがわかる。日本の子どもについて言えば、従来の家族制度のあり方や家庭の構成員によって、子どもの性格形成にも少なからず、影響があった。例えばかつて大家族の一員で、しかもきょうだい数が多いと、長子的性格とか末っ子的性格として研究課題に大いに取り上げた時代もあった。親の養育態度と子どもの性格形成の関係は今なお話題となる。きょうだい数が多い時代は一人っ子の存在は、問題ある存在として見られた時代があった。現代ではとても考えられないことである。

*女子短期大学部 保育科

今、なお日本で大きな社会的課題となっているのは少子高齢化の継続である。

日常生活の中で、少子高齢化という言葉が定着してから、15年以上経過している。人口のバランス、人口問題の適切さからいっても、大きな問題を抱えてなお進行している。親と子どもといった、二世帯いわゆる核家族の形態は家族関係の変化のみならずその子育てにも様々な影響を及ぼしているのは周知の通りである。現在、都市部の生活で殆んどごく当たり前のこととして、核家族の形態は定着している。農業や漁業などを家族分業又は協力してやっているところは必ずしも核家族の形態を取ってはいない。

わが国の子育てに関連するもっとも大きな社会問題は、なんと言っても少子化であろう。一世帯あたりの特殊平均出生率が2.0を切ってから20年以上経過している。そして2008年は特殊平均出生率は1.34人前後で推移している。子どもの数が減りそして家族は親子2世代が圧倒的に多い状況下で、子育てに関する親の迷い、悩み、戸惑いが起きてくるのはごく自然と考えられる。特に幼児期の子育てに関しては、保育所や幼稚園が大きな役割を果たしてきているし、これらは従来の機能に加えて子育て支援を掲げ、どこの自治体でもバックアップしている。幼稚園、保育園に加えて、認定子ども園も子育て支援を大きなアピールの一つとしている。

本研究は幼稚園、保育園の保護者に子育ての実践をアンケート調査したものである。目的－幼児期の子どもの生活の実態を明らかにする。保護者の子育ての実践から、しつけについても明らかにする。保育所と幼稚園の保護者の子育て実践の相違なども見る。

方法

期 間－2006年6月にアンケートを依頼し回収する。

対象園－宮城県S市内私立幼稚園2箇所及びS市内民間保育園2箇所。依頼数、回収率は表1に示すとおりである。A, Bは幼稚園、C, Dは保育園である。

表1 対象園

	依頼数	回答数 (回収率)
A	60	53 (88.3)
B	105	73 (69.5)
C	100	80 (80.0)
D	58	43 (74.1)
計	323	249 (77.1)

A 幼稚園はS市南部に位置し、周辺は商店街、アパート等も多い。自然環境としては大きな河川、川原等がある。B 幼稚園はS市南東部にあり、住宅地や官舎等があり、商店街にも近い、C 保育園はS市西部にあり、新興住宅地で、アパートやマンション等が多い。D 保育園はS市北部にあり、比較的古い住宅地である。地下鉄駅に近いこともあり、地域外から通っている子どももいる。

アンケートの内容はI. 生活のリズムとして、食事、排泄、衣服の着脱、起床や就寝、しつけなどに関するもの20項目とII. 遊び行動に関するもの6項目と自由記述の自分の子育ての意見である。本研究ではII. 遊び行動に関するものは報告しない。

結果

A, B, C, D各園の回答者は母親中心である。C, D 保育園に父親が2名ないし4名、B 幼稚園1名、A 幼稚園で祖母2名の回答があった。

回答者年齢は表2に示す通りである。

各園とも30代が最も多く、C園を除いては母親の70%以上が30代である。C園は4園中20代母親の回答者が比較的多い。D園、B園は40代が4園中多い方である。各園の園児のきょうだいの有無は表3に示す通りである。

幼稚園A、Bは「きょうだいあり」が80%から90%であるが、保育園C、Dは60%弱である。幼稚園A、Bに比較して、保育園C、Dは「きょうだい無し」が数値上際立って多い。保育園児の場合、母親が働いていることが条件となっているので、子ども数の多少は母親の労働条件も大きな一つの要因といえる。きょうだい数の分布を見ると、二人きょうだいが約60%と圧倒的に多い。3人、4人きょうだいは4園全体から見るとそれぞれ約20%、18%程度である。

表2 回答者年齢

	母 親			父 親				祖 母	計
	20代	30代	40代	20代	30代	40代	50代	50代	
A	9 (17.0)	42 (79.3)	0	0				2 (3.8)	53
B	7 (9.9)	53 (74.7)	10 (14.1)		1 (1.4)			0	71
C	16 (21.3)	46 (61.3)	6 (8.0)	1 (1.3)	4 (5.3)	1 (1.3)		1 (1.3)	75
D	3 (7.0)	30 (70.0)	8 (18.6)		1 (2.3)		1 (2.3)	0	43

表3 きょうだいの有無

	なし (%)	あり (%)	きょうだい数分布				記入 無し
			2人	3人	4人	5人以上	
			A	5 (9.4)	48 (90.6)	29	
B	13 (18.3)	58 (81.7)	41	7	9	0	1
C	31 (41.3)	44 (58.7)	20	8	13	1	2
D	18 (46.9)	25 (58.1)	13	9	2	1	0

表4 各園の子どもの年齢分布

	0～2 (%)	3～4 (%)	5～6 (%)	7以上 (%)	計
A	1 (1.8)	27 (49.1)	27 (49.1)	0 (0)	55
B	1 (1.3)	28 (35.5)	46 (58.2)	4 (5.1)	79
C	26 (34.2)	26 (34.2)	22 (29.0)	2 (2.6)	76
D	13 (29.6)	17 (38.6)	14 (31.8)	0 (0)	44

子どもの性別はA幼稚園（男28、女25）とC保育園（36、39）男女比がほぼ同じだが、B幼稚園（42、29）は男児が多く、D保育園は（16、26）は女児が多い。4園全体では男女比（122、119）はほぼ同じである。

幼児の生活のリズムについては、食事やトイレの自立、衣服の着脱、起床や就寝時間などについて答えて貰った。

食事について

「食事は比較的決まった時間を取るか」という問いに対しては、各園共通して、殆ど100%近く「はい」と言う回答であった。

次に食べ物の好き嫌いについては、表5に示す通りである。

表5 食べ物の好き嫌いの有無

	ある (%)		ない (%)		その他
A	32 (66.7)		16 (33.3)		6
B	51 (71.8)		20 (28.2)		4
C	46 (64.8)		25 (35.2)		13
	3歳未満児	3歳以上児	3歳未満児	3歳以上児	
	15 (60.0)	31 (67.4)	10 (40.0)	15 (32.6)	
D	27 (61.4)		17 (38.6)		4
	3歳未満児	3歳以上児	3歳未満児	3歳以上児	
	5 (41.7)	22 (68.8)	7 (58.3)	10 (31.2)	

各園共通しているのは「好き嫌い」があるという回答が60%から70%前後で、子どもたちは、食べ物に関しては多様である。C園とD園については年齢の幅が大きいのので3歳未満児と3歳以上の幼児をそれぞれ分けて見ると、C園は3歳未満と3歳以上の子どもたちの傾向は各園全体の傾向と似た傾向を示している。D園3歳未満児のみは「好き嫌い」無しの方が多く、他園に比較して逆転している。ただ対象人数が12名と少ないので、個人の特徴が出たことや、「好き嫌い」が始まる前の年少児の食生活の発達のプロセスとも考えられる。

幼児は食べ物の「好き嫌い」があることが半数以上はあると解ったが、回答者に好きな食べ物嫌いな食べ物を各3ずつあげて貰ったが、その結果が以下表5 a, b, c, dに示す通りである。

A幼稚園の回答者が好きな食べ物あるいは嫌いな食べ物としてあげたものは具体的料理名や材料など混じっているが、そのまま列挙した。A幼稚園で好きな食べ物として、一番多くあげられた「きゅうり」は他の園では見られなかった。一方、嫌いな食べ物としてあげた1位から4位までは、「トマト、野菜、ピーマン、ねぎ」とすべて野菜で、「きゅうり」「トマト」がそれぞれ好き嫌いの1位とあげられたのが興味深い。A幼稚園の好きな食べ物としてその他選択されたのは「おにぎり、すし、細切りにんじん、うどん、お好み焼」等があげられた。また、嫌いな食べ物としては、「混ぜごはん、骨のある魚、海草、にんじん、のり」等があげられた。

次にB幼稚園の結果を見ると、表5 bに示すように、好きな食べ物の上位は「肉、カレー」を除いてはA幼稚園の回答とは異なる。嫌いな食べ物の上位3位には、「ピーマン、野菜、トマト」があげられた。保護者に選択された、食べ物を見ると、幼児が好きな食べ物の傾向と家庭での食生活の一端が見える。その他好む食べ物として「ロールキャベツ、メンチコロッケ、いなり寿司、かんぴょう巻、プリン」等であり、嫌いなものとしては、「アスパラ、グリーンピース、シチュー」等があげられた。

表5 a A幼稚園 園児の好きな食べ物、嫌いな食べ物

順位 (選択数)	好きな食べ物	順位 (選択数)	嫌いな食べ物
1位 (9)	きゅうり	1位 (11)	トマト
2位 (7)	肉	2位 (8)	野菜
3位 (6)	ハンバーグ、カレー	3位 (5)	ピーマン
4位 (5)	ごはん、果物、いちご	4位 (3)	ねぎ
5位 (4)	魚、唐揚げ、ピーマン	5位 (2)	納豆、刺身、煮物、じゃがいも、きのこ、グリーンピース、みかん
6位 (3)	ブロッコリー、めん類 トマト、マグロの刺身		
7位 (2)	みそ汁、卵焼き、目玉焼き めん類		

表5 b B幼稚園、園児の好きな食べ物、嫌いな食べ物

順位 (選択数)	好きな食べ物	順位 (選択数)	嫌いな食べ物
1位 (20)	果物	1位 (21)	ピーマン
2位 (16)	肉	2位 (14)	野菜
3位 (14)	めん類	3位 (8)	トマト
4位 (8)	カレー、ごはん	4位 (7)	なす
5位 (6)	ハンバーグ、納豆、パン類	5位 (6)	ねぎ
6位 (5)	魚、ぎょうざ	6位 (5)	ブロッコリー
7位 (4)	トマト	7位 (4)	きゅうり
8位 (3)	卵、ヨーグルト、ウィンナー、いちご、グラタン、チーズ、まぐろ	8位 (3)	玉ねぎ、レタス、牛乳
9位 (2)	オムライス、おかし、バナナ、そば	9位 (2)	卵、果物、梅干、ほうれん草、とうもろこし、生もの、カレー、辛いもの

C保育園、D保育園については食べ物については、3歳以上児と3歳未満児に分けて集計した。0, 1, 2歳児は発達段階から言っても、離乳食の子どももいたりして食事の内容も異なる。また、A幼稚園、B幼稚園とも対象は3歳以上児であるので、3歳以上児の各園の全体的な比較も可能である。

C保育園3歳以上児で好きな食べ物3位以内に他の園と共通してあげたのは「肉」である。嫌いな食べ物の上位にC保育園でも「ピーマン、トマト」があげられた。C保育園は園児の食事に関してはいろいろ指導を行い、園での食事方法に工夫している。表5cにあげなかった好きな食べ物は他に「きゅうり、マメ類、キャベツ、みそ汁、シチュー、混ぜごはん、焼そば」等で嫌いなものとしては「野菜炒め、グリーンピース、サラダ、にもの、チーズ」等である。

表5 c C保育園、園児の好きな食べ物、嫌いな食べ物 (3歳以上児)

順位 (選択数)	好きな食べ物	順位 (選択数)	嫌いな食べ物
1位 (11)	果物	1位 (9)	ピーマン
2位 (10)	魚	2位 (6)	肉
3位 (9)	肉	3位 (4)	トマト
4位 (6)	刺身	4位 (3)	レタス、アスパラ、きのこ
5位 (5)	納豆		
6位 (4)	豆腐	5位 (2)	ナス、ブロッコリー、
7位 (3)	メロン、トマト、唐揚げ、パン		長ねぎ、豆腐、野菜、すっぱいもの、
8位 (2)	卵、いも類、めん類、ラーメン、ヨーグルト、いちご、カレーライス、たらこ		じゃがいも

C 保育園 3 歳未満児の好きな食べ物として、「カレーライス、ごはん、魚、にんじん」等の選択数が比較的多く、他に「パン、牛乳、ヨーグルト、いちご、みそ汁、焼きおむすび」等があった。嫌いなものとして「豆腐、肉、トマト、レタス、野菜類」等である。

表 5 d D 保育園、園児の好きな食べ物、嫌いな食べ物（3 歳以上児）

順位（選択数）	好きな食べ物	順位（選択数）	嫌いな食べ物
1 位（7）	果物	1 位（6）	ピーマン
2 位（3）	納豆、みそ汁、ぶどう	2 位（2）	レタス、なす、ねぎ、
3 位（2）	りんご、メロン、いちご、 トマト、とうもろこし、肉、 刺身、チーズ		パイナップル、チーズ、卵

表 5 d にあるように D 保育園で好きな食べ物として選択数が多かったのは、C 保育園、B 幼稚園と同じように「果物」で、嫌いなものとしては「ピーマン」があげられた。D 保育園の 1 名選択の好きな食べ物は「さつまいも、山菜、大根、冷やし中華、シシヤモ」等がある。1 名選択の嫌いなものは「ヨーグルト、じゃがいも、野菜、トマト、チャーシュー」等があげられた。D 保育園 3 歳未満児の好きな食べ物で一番選択が多かったのは「納豆」で、「嫌いなものは特になし」という回答も多かった。嫌いなものとして他に「果物、レタス、ピーマン、魚、竹輪」等があげられた。

次に「食べる事を喜んでいるか」という問いに対しては、各園園児とも「喜んで食べる」が圧倒的に多かった。特に D 保育園、A 幼稚園は 90% 台で、B 幼稚園と C 保育園も 80% 以上であった。食べ物の「好き嫌い」は多くの子どもがあるが、食べる事を喜ぶのは好ましい。家族が食事を一緒にとらない、孤独な孤立した小学生の食事風景等が絵日記で、かなり以前子ども白書等でも紹介されてきたが、幼児期の子どもたちについて聞いてみた。

表 6 食事（朝・夕食）は家族一緒のことが多いですか

園	はい (%)	いいえ (%)	その他
A	47 (90.4)	5 (9.6)	5
B	55 (77.5)	16 (22.5)	4
C	63 (85.1)	11 (14.9)	10
D	36 (83.7)	7 (16.3)	5

各園によって条件がいろいろ異なる。B 幼稚園は家族一緒の食事が取れないが 4 園中最も多いが、夕食時は父親不在と説明している回答もあった。4 園全体的に見ると、80% 台が一緒に食事しているという回答であった。

排泄について

表 7 1 人でトイレができますか

	はい									いいえ								
	0	1	2	3	4	5	6	他	0	1	2	3	4	5	6	他		
A				6	21	21	3	3				0	0	0	0			
B				12	13	33	9	4				0	2	2	0			
C	0	1	2	14	12	17	2	1	1	12	10	0	0	3	0			
D	0	0	0	9	7	9	1		1	6	6	1	0	2	1			

次に幼児の生活の中で、自分で排泄が出来るようになるのは、大きな課題である。トイレトトレーニングの考え方は、時代や文化によっても異なる。最近の母親たちは紙おむつの普及や「ゆったり考えて良い」などの口コミなどの影響もあり、3歳児くらいでもオムツをしていてもあまりあわてない母親もいる。表7は一人でトイレが出来るかどうかの問いである。4園の対象児は、3, 4歳になると殆ど、一人でトイレが出来るという。しかし5歳児、6歳児でも排泄がまだ一人で出来ない子どももいるのが、表7からも見える。トイレト訓練の自宅での工夫は表8に示す通りである。トイレト訓練では、AB幼稚園とCD保育園の違いはかなり明確である。二つの幼稚園では70～80%近く「自宅で工夫した」としているが、両保育園は自宅での工夫は50%前後にとどまっている。保育園に通っている幼児の親は園側に幼児のトイレ訓練をゆだねている部分が見られる。アンケート内にそのような記述も見られる。「はい」と回答した保護者に「何歳くらいから、トイレ訓練を始めたか」を聞くと両幼稚園は「2歳から始めた」が一番多く、2歳半、3歳と続く。両保育園は「2歳と2歳半から始めた」が多く、次には1歳半と成る。保育園児の保護者は「トイレ訓練をやった」と答えたのは、半数くらいだが、「やった」と答えた親は幼稚園児の親より訓練が早い傾向が見える。

表8 トイレ訓練は自宅で工夫したか

	はい (%)	いいえ (%)	その他
A	39 (79.6)	10 (20.4)	4
B	52 (72.2)	20 (27.8)	3
C	36 (48.6)	38 (51.4)	11
D	24 (55.8)	19 (44.2)	5

次に「トイレのしつけで何か困ったことがあるか」については表9に示す通りである。

表9 トイレのしつけで困ったこと

	ある (%)	ない (%)	その他
A	8 (15.7)	43 (84.3)	6
B	8 (12.3)	57 (87.7)	10
C	15 (21.7)	54 (78.3)	15
D	3 (8.3)	33 (91.7)	12

各園の保護者が共通して「トイレのしつけでは困ったことがある」と何人か答えた。4園の中では一番多いC園の事例では、便に関するものが多く、「ウンチのタイミングが難しい」「ウンチの時、なぜかオムツをはかないと出

来ない、ウンチをトイレでしてくれない」「大便の拭きかた（しっかり拭けないのに、なぜか自分で拭きたがる）」その他「夜尿」や「遊びに夢中になっておもらし」「トイレでする意味が解らず、出てから教える」「暗くなると一人で行けない」「訓練中、次第にトイレに行くのを嫌がる（2歳児）。母親側の悩みとして、「トイレトトレーニングの仕方がわからない」「プレッシャー感じる（特に年配の方から）」等があげられる。これらの事例は必ずしも3歳未満児ではなく、4歳児、5歳児にも見られる。その他3園でもいくつかあげられたのは、「和式トイレが使えない」「暗いと嫌がる」といった内容と大便に関するもの「ウンチ教えない」「ウンチがまんする」「ウンチ、トイレでするのが嫌でオムツにする」その他尿に関するものは「夜尿」「おもらし」などがある。排泄が完成するまでは、大人のゆったりした自然な対応と許容が必要である。

衣服の着脱などについて

幼児の身の辺の自立で、食事、排泄のほかに衣服の着脱も、ある文化様式では必要とされる。衣服の着脱については次に示す通りである。A B 幼稚園の対象は3歳以上の子どもたちであるが、着たり脱いだりは殆ど全員できると回答している。B 幼稚園では3歳児、4歳児一名ずつまだ出来ていないと回答している。C 保育園と D 保育園については、3歳未満児と3歳以上児に分けてみると、3歳未満児は衣服の着脱は出来る子、まだ出来ない子どもが半々くらいなのが表10を見ても分かる。靴を一人で履はけるようになるのは、3歳以上になるとほぼ出来る。一方ボタンの取り外しは3歳未満児には難しいことが表10からも伺える。指先の細かい運動機能の発達に2歳児と3歳児ではかなり異なることが分かる。

人間の生活様式が多様であればあるほど、起床、就寝の時間は様々である。親は一般的には子どもになるべく、子どもの年齢に応じた生活リズムを持った起床、就寝を期待する。幼い子どもたちは、大人の生活リズムに引きずられて、夜なかなか早く寝ないといわれる。

表 10 自分で衣服の着脱等出来るか

		できる		できない		その他
A	衣服着脱	54		0		3
	靴をはく	52		0		5
	ボタンの取り外し	52		0		5
B	衣服着脱	70		2		3
	靴をはく	71		0		4
	ボタンの取り外し	68		0		7
C		3歳未満	3歳以上	3歳未満	3歳以上	
	衣服着脱	12	47	14	2	8
	靴をはく	9	48	16	0	9
	ボタンの取り外し	1	43	24	4	10
D		3歳未満	3歳以上	3歳未満	3歳以上	
	衣服着脱	7	30	6	1	4
	靴をはく	5	27	7	2	6
	ボタンの取り外し	2	27	10	3	6

A B C D 4園の子どもたちの起床、就寝の様子は表11、表12に示す通りである。

睡眠について

表 11 各園の子どもの起床時間

	6時	6時半	7時	7時半	8時	8時半	その他
A	4	11	16	20	3	0	2
B	9	15	19	20	9	0	2
C	11	26	23	10	4	2	7
D	4	12	19	4	1	0	7

A、B 幼稚園は最も多い起床時間帯は7時半で7時から7時半頃に大体集中（50～60％）して、子どもたちは起床している。C、D 保育園は両幼稚園より約30分から1時間早い時間帯に起床が集中している。C 保育園は6時半が最も多く次に7時となっている。D 保育園は7時起床が最も多く次に6時半となっている。それぞれの園までの距離、交通機関の便利さ、親の就労条件の影響が見られる。

表 12 各園の子どもの就寝時間

	8:00	8:30	9:00	9:30	10:00	その他	合計
A	3	12	24	6	8	3	56
B	11	14	24	10	8	7	74
C	0	6	26	18	21	12	83
D	2	3	7	15	15	5	47
合計	16	35	81	49	52	27	260

表 12 を見ると A、B 幼稚園は就寝時間が9時に集中し、次に8時半就寝が多い。C、D 保育園は9時も多いが9時から10時の間が多い。起床と就寝時間の関係は4園のデータからなので、傾向としかいえないが、幼稚園児は起きる時間が保育園児より遅く、寝る時間は早くなっている。就寝時間「その他」では幼稚園児11時という記述もあった。親と子どもの関係を幼児期重視するならば、家族のライフスタイルを受け入れて、園側は子どもの登園時間を柔軟に考えて良い。そのような対応の保育園が増えていることも事実である。

家庭のしつけ

表 13 家庭のしつけ

			はい	いいえ	その他
A	1	あいさつを指導	54	0	2
	2	年長者等の尊重の教育	40	14	3
	3	特別援助がいる子どもや外国人への言葉かけの勧め	22	29	5
B	1	あいさつを指導	69	2	3
	2	年長者等の尊重の教育	53	17	5
	3	特別援助がいる子どもや外国人への言葉かけの勧め	21	49	4
C	1	あいさつを指導	68	8	7
	2	年長者等の尊重の教育	48	28	8
	3	特別援助がいる子どもや外国人への言葉かけの勧め	34	41	8
D	1	あいさつを指導	39	4	4
	2	年長者等の尊重の教育	28	15	5
	3	特別援助がいる子どもや外国人への言葉かけの勧め	12	29	6

表13を見ると「家庭で意識的にあいさつ（おはよう、ありがとう、いただきます、ごちそう様、おやすみ、さよなら等）をするよう、指導しているか」にはどの園でも共通して殆ど指導していることが分かる。2、「年長者、特にお年寄りを大事にし、敬うことを教えているか」はA、B幼稚園のほうがC、D保育園より「はい」回答が多い。3の問い「普段、あまり身近で出会わない子ども（例えば特別援助を必要とする子ども、外国人等）に会ったら、友だちになり、積極的に言葉をかけるように話すか」はどの園も「いいえ」が、多かった。この問いに対する母親の年代との関係を分析したが、特には見られなかった。A幼稚園とC保育園は「いいえ」回答が他の2園より目だって少なかったので、また母親の年齢層も若い2園なので分析した。若い年齢層が日常性と異なることに鋭敏かと年齢分析をしたが、必ずしもそうともいえなかった。3の問いに対しては「出会うチャンスが無いので私も子どもも難しい」「会う機会がない」という書き込みもあった。3の問いは同質文化に慣れ親しんでいる我々が外国の人々や行動、反応が多くの人々から異なる援助が必要な人々への保護者の子どもの働きかけを見る項目でもあった。グローバル時代といっても地方都市では、外国人と常に接しているとはいえないし、様々な重い障がいを持つ子どもや大人の人々といつも出会える環境でもない。

次に家庭のしつけで特に大切にしているものを、選択肢6つの中から二つ選択してもらった。「自分のことは自分でやるよう努力する」がD園以外は断然多く3園の回答者の67%から70%が選択した。D園の回答者は「他の人に迷惑をかけない」が最も多く（53.7%）ついで「自分のことは自分でやるよう努力する」を選択（46.4%）した。A、B幼稚園とC保育園は「自分のことは自分でやるよう努力する」と「他の人に迷惑をかけない」が1、2番目に多い選択で、D園は同じ項目を順位逆に選択した。「親の言うことを聞く」「家族の言いつけを良く守る」等は一番下位に選択され、むしろ子どもの自立や自己主張、他人に迷惑をかけない等をより多く選択した。「子育てで特に困ることはあるか」の問いに「ある」と各園回答した。C保育園が最も多く（36.5%）D保育園が最も少ない（17.1%）A幼稚園（25.0%）B幼稚園（29.7%）と続く。各園の保護者は子育ての悩みはそれぞれ持っている。わずか2園ずつの比較ではあるが、子育ての悩みは幼稚園児の親と、保育園児の親では内容が異なる。幼稚園児の母親から「父親の帰宅を待ってなかなか寝ない」、「兄弟げんかする」、「自分でできることは自分でやって欲しい」、「反抗的な態度する」、親側の問題として「身近な大人との関わり」、「自分のいらいら」、「地域の人との交流がもてない」、「父親の帰宅遅く、子育て手伝って貰えない」等があげられる。

保育園児の母親は子どもの対応や自分自身の問題が、自分の勤務条件から影響を受けている悩みを様々述べている。例えば「帰りが遅く、ゆっくり子どもと接する時間が無い」、「母に夜勤があり、子どもと一緒に過ごす時間がない」、「親の帰宅が遅いので、寝る時間が遅くなってしまう」、「仕事をしている為、子どもの生活のリズムがうまく整えられない」家族関係では、「核家族で祖父母が遠方なので子どもの急な病気の時困る」その他乳児の子育てに悩む様子もある。「意味が分からず泣かれたらどうしてよいか分からなくなる」、「子どもとコミュニケーションが取れない」など多くあげられた。子育ての支援の重要性が見える。

次に「家庭で親子が一緒に楽しい時間を過ごすよう、心がけているか」に対してはB園（88.4%）を除いては殆ど90%台で「はい」と回答する。親子が家庭で一緒に楽しいひと時を過ごす方法はいろいろある。その中の一つに幼児にとって親に読んで貰う絵本の世界がある。「自宅で時間があれば絵本を読んであげるか」の問いには各園の保護者とも積極的である。「はい」回答はD園が最も多く（95.2%）C園（79.7%）B園（76.8%）A園（67.9%）となっている。

「はい」と回答した人にどんな絵本を読んであげているかと聞くと A 幼稚園、B 幼稚園は「日本昔話」が一番多く、次に両園とも、「日常生活もの」が多かった。3 歳未満児が多い C 保育園、D 保育園は「日常生活もの」を一番多く読んであげ、続いて「動物絵本、日本昔話」だった。絵本の傾向は幼稚園と保育園は上位に読まれる傾向が分かれた。4 園全体を通して一番多く読まれたのは「日常生活もの」85、次は「日本昔話」71、「その他」45、「動物絵本」43、「乗り物絵本」34、「外国のもの」33となっている。「その他」をあげた人でコメントをつけたものとしては「簡単な物語」「音の出る童謡」「絵本一般」「キャラクターもの」等様々あげていた。

考察

子育ての実態をアンケート調査により、S 市内のごく限られた範囲ではあるが、保育園、幼稚園に通っている幼児たちの日常生活が見えた。最近「食育」と盛んに言われるが、幼児期から食生活を大切にすることが重要であると、今回の調査でも感じられた。親はなるべく手抜きをしないで、可能な限り食事の工夫をすることが大切である。保育園児と幼稚園児の母親からのコメントの中には、夫の協力を願っている意見が幾つかあった。夫婦協力の体制は夫側にもかなり意識され、深まってきているが、夫あるいは父親としてのより一層の子育ての協力が望まれる。

幼児が家族、家庭の事情で保育園か幼稚園に通園しているが、2006 年からは国の施策で認定子ども園もスタートした。保育の形態を一本化するには、まだ時間もかかるし、準備期間が十分かという疑問も残る。現在盛んに行われつつある地域の子育て支援の強化はやはり必要と思われる。S 市でも待機児童の問題、公立保育所の民営化の課題など多々あるが、幼児の豊かな発達保障を保育専門家や親や行政等が協力していくことで楽しい子育てができると良い。現代の生活スタイルに合った保育方法を模索し、質の高い保育を目指すことである。保育者養成大学では、幼児、児童の幸福な日々の成長を援助できる優れた保育者を教育できるカリキュラムの掘り起しが大切と考える。

二つの保育園と幼稚園を分析の過程で比較したが、統計的処理は殆どしなかった。統計的な面から見るとは人数が少なく、個人の特色や園の特徴が出ると思われた。母親のコメント等を更に分析して子育ての問題を探りたい。今回は幼児の生活の実態の確認にとどまり、遊びの実態と生活との関係などは今後の課題としたい。

参考文献

- 小林登編 (1979)、現代のエスプリ、子どもの生態学、149、至文堂
- 日本子どもを守る会編 (2007)、子ども白書、草土文化
- 日本子どもを守る会編 (2008)、子ども白書、草土文化
- 心理科学研究会編 (2000)、育ちあう乳幼児心理学、有斐閣

謝辞

アンケートにご協力下さった、S 市内の 4 園の職員の方々および保護者の方々には紙面を借りて、感謝致します。

